

本時の振り返り

1 第5学年『合同な図形』（7/10）

2 本時の概要

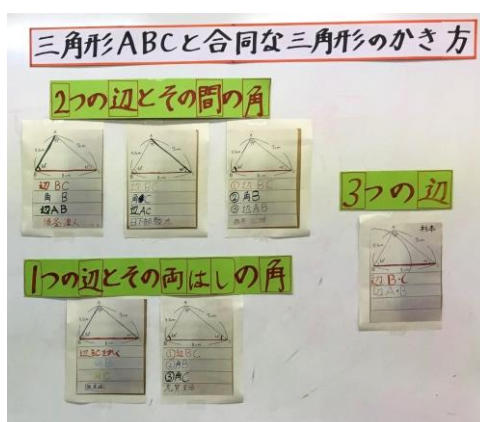
本時では、既習事項である合同な三角形のかき方を使って、合同な平行四辺形のかき方を考え説明するという学習を行った。学級全体で発表する際には、画用紙に作図の手順を「角B」や「辺AB」など端的な言葉で表し、自分のやり方を説明した。



3 実践の振り返り

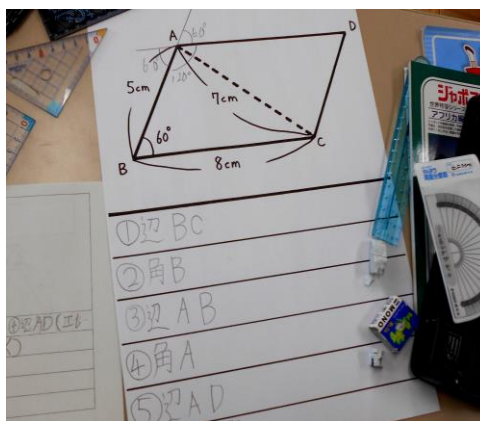
(1) 算数コーナーの活用

本時で重要となる既習事項は「平行四辺形を対角線で分けた2つの三角形は合同であること」や、合同な三角形のかき方「1つの辺の長さとその両はしの2つの角の大きさ」「2つの辺の長さとその間の角の大きさ」「3つの辺の長さ」であり、算数コーナーに既習事項を残した。数名の児童が、授業中に算数コーナーを見ながら考え、合同な三角形のかき方を想起し活用することができた。また、かき方の掲示物を黒板に再び掲示することで、既習事項が本時に生きてくることを意識させることができた。



(2) 説明する活動の重視

第3、4、5時の合同な三角形を作図する学習から、自力解決の際は自分の考えをもとにワークシートに作図するが、発表の際はワークシートを拡大した別の画用紙に記入し説明するという流れで学習を行ってきた。その際に作図の手順を「角B」「辺AB」など端的な言葉で表し、それをもとに作図の仕方を集団検討した。作図の手順を書くことで、作図の仕方を整理し、流れに沿った説明につなげることができた。しかし、作図の流れを理解した児童にとっては他の児童の説明は分かりやすいが、そうでない児童にとっては細かい説明が書かれていないこともあり分かりづらかった。また、全体発表の前にペアで意見交換する時間を作り、自分の考えを確かめる場を設けると理解を確実なものにできたと考える。



4 協議内容

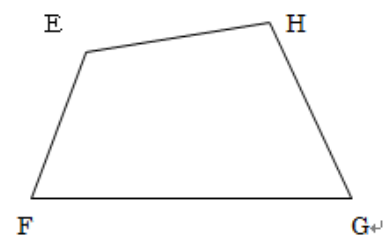
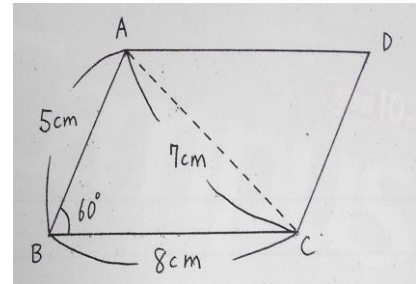
よかった点

- 算数コーナーが本時の考えの手助けになってよかった。

- ・自力解決の前に「このやり方は使えない」などと確認することで、解決の見通しをもたせることができた。
- ・作図の手順を記すことで、どの説明をしているのかが分かりやすかった。

改善点

- ・平行四辺形A B C Dに対角線が引いてあるために、合同の三角形を意識しにくかったのではないかと。(既習事項である「合同な三角形のかき方を使って」という文を入れない方がよかったですのではないかと。)
- ・授業のねらいにもよるが、平行四辺形ではない四角形E F G Hを取り扱った方が、合同な三角形をかくという点において、しっかりと考えることができたのではないかと。
- ・作図したものをペアで確認する時間があつた方がよかつた。
- ・トレーシングペーパーに作図をさせ、正確に作図できていたかどうかを自分で確かめることができるとよかつた。
- ・平行四辺形を対角線で分けた2つの三角形が合同であるから、対応する辺、点、角を全体で確認した方がよかつた。
- ・実物投影機を使用し、まずはワークシートを拡大表示しながら説明させ、その後の集団検討の際に黒板に掲示すると分かりやすかつたのではないかと。
- ・実際に教師が黒板上で作図する手順を示すことで、手順を理解していない児童にとっては分かりやすかつたのではないかと。



5 講師講評

講師：国立教育政策研究所総括研究官 千々布 敏弥先生

- ・発言者が少なく、教師が思い描く流れに沿った考えをする児童ばかりが取り上げられていた。
- ・教師が、児童一人一人に説明する時間が長く、全体で考えを検討する時間が不十分であった。
- ・児童が自分の考えを確かめるために、ペアワークを活用するとよい。
- ・本校の校内研究の積み重ねを意識し、学び合いの視点を取り入れる必要がある。
- ・ペアワークを定着させるために、普段の生活の中で友達の見解を聞き合う活動が効果的である。
- ・教師が学級全体に対し言葉で分かったかどうかを確認するのではなく、ペアワークの状況を見ながら、全体の理解度を計っていくことが重要である。

講師：国立教育政策研究所教育課程調査官 笠井 健一先生

- ・教師が具体的に、「最終的に子どもがどんなことができるようになっているか」をイメージできていることが重要である。
- ・本時の活動においては、手が止まる児童は少なかったが、当てはめ問題の際に「どのような作図の仕方を求めるのか」ということが曖昧であり、指導案上の評価基準の多さが原因となっているのではないかと。